

論文内容要旨

論文題目

看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度の開発に関する研究

教育・研究領域： 生涯生活支援看護学

氏 名： 浅野 志保

【内容要旨】

看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度の開発を目的とした。

質的研究結果と文献検討より、尺度原案 80 項目を作成した。内容妥当性と表面妥当性を検討し、38 項目に再構成した。全国 100 床以上の病院の臨床経験 3 年以上の看護師で、終末期がん患者のケアに携わる 1196 名に対し、尺度原案 38 項目を含むオンライン調査を実施した。統計解析では、探索的因子分析、内的一貫性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を確認した。

有効回答 370 件を探索的因子分析した。【患者と家族の対話のニーズをアセスメントする】【家族理解を深めるために関心を寄せる】【患者と家族の相互のものの見方を尊重して関わる】【シームレスな対話支援のためにチームでアプローチする】の 4 因子 22 項目が抽出された。Cronbach's α 係数は、尺度全体 0.94、下位尺度 0.80～0.91 であった。確証的因子分析、既知グループ技法、収束的妥当性、併存的妥当性により妥当性が検証された。

看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度の信頼性・妥当性が検証された。

令和4年11月30日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 浅野志保

論文題名： 看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度の開発に関する研究

審査委員：主審査委員 布施 淳子

副審査委員 森鍵 祐子

副審査委員 古瀬 みどり



審査終了日：令和4年 11月 30日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

がん対策推進基本計画(第1期)では「がんと診断された時からの緩和ケア」が重点的に取り組むべき課題として位置づけられ、「すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上」が全体目標の1つとして挙げられてきた。終末期では家族の不和が顕在化しやすく、終末期では患者と家族がお互いの気持ちを察する余裕をもてない状況にあり、認識のズレが生じやすく、コミュニケーションに困難を抱えやすい。終末期にあるがん患者と家族に関わる機会の多い看護師は、終末期がん患者と家族のコミュニケーションの満足感や達成感を高め、納得のいく看取りが実現するよう支える重要な役割を担う。終末期がん患者と家族の対話支援を行うためには家族理解や家族アセスメントの視点を取り入れた対話支援の指標が求められる。本研究は看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。

看護師の終末期がん患者と家族間の対話支援自己評価尺度の開発は、緩和ケア認定看護師、がん看護専門看護師、家族支援専門看護師、熟練看護師を対象とした質的帰納的研究の結果と文献検討により、尺度原案 80 項目を作成後、内容妥当性指数および表面妥当性の検討により 38 項目に再構成した。この 38 項目について、100 床以上の 120 病院(無作為抽出)の 3 年目以上の看護師で終末期ケアに携わる 1196 名を対象にオンライン調査を実施した。有効回答 370 件に対して、探索的因子分析を行った結果、【患者と家族の対話のニーズをアセスメントする】【家族理解を深めるために関心を寄せる】【患者と家族の相互のものの見方を尊重して関わる】【シームレスな対話支援のためにチームでアプローチする】の 4 因子 22 項目が抽出された。 α 係数は尺度全体 0.94、下位尺度 0.80~0.91 であった。確証的因子分析では、適合度は $\chi^2=504.656$, $P=0.00$, CMIN/DF = 2.486, GFI=0.888, AGFI=0.860, CFI=0.931, RMSEA=0.063 であり、一定程度の構成概念妥当性が検証された。また、既知グループ技法にて緩和ケア病棟・病床のある病棟の勤務経験あり群とがん看護領域の認定・専門資格あり群で有意に得点が高く示された。また、一般病棟におけるがん患者の家族ケア実践評価スケールと日本語版ターミナルケア態度尺度と正の相関が認められ、収束的・併存的妥当性が検証された。

本研究について、論文及び口頭発表に基づき審査した結果、看護学に貢献できる新知見が含まれ、がん看護の実践に有意義であることから、本研究は学位論文(博士)に相応しいものとして評価した。